中野重治「プロクラスティネーション」: 作中人物野上の描かれ方に注目して

第59回中野重治を読む会@石川四高記念文化交流館
2023/2/4　　由谷 裕哉

1　書誌と概要

『群像』1963年5月号と6月号に分載。後半のタイトルは「三人」だったが，単行本**『眺め』**(筑摩書房，1965)に再録された際，「プロクラスティネーション」として一作とされた。初出の年は，著者の中野重治が日本共産党から除名された前年に相当する。なお，後半の「三人」の３人目が誰を指すかは，現在の形で見るとかなり分かりづらい(後述)。新しい『中野重治全集』では第４巻pp. 162-198.

概要；初老の主人公安田が留守番の時に，妻の要望で買った地球儀のグリーンランドを眺めていて，高校時代に理系の友人だった野上篤(モデルは中谷宇吉郎とされる)を想起する所から始まる。野上のグリーンランドでの研究は，「アメリカの反ソ戦略体制に組み込まれている」(p. 174)とされる。遅延・先延ばしを意味するタイトルは，物語中盤に別の古い友人だった鹿沢から送られて来た手紙にある語。決断を「先延ばし」してしまった後悔に関わるのは，(徳田球一らによる)「人民に訴ふ」に異論を提起できなかったこと，同志的な人物への言葉掛け，野上への問いかけ，などか。

この小説の読みは，以下４つの箇所をどう評価するかにかかっているのではないか(詳細は３で)。

〈1〉安田が前年亡くなった野上を回想する際に出て来る，彼のグリーンランドでの研究が米空軍の援助によるとされている設定(p. 171ほか)；⇒後述のように，末尾で評価が正反対に変わる。

〈2〉鹿沢からの手紙の後，全集版で１行空白がある後(p. 186)に出て来る，「大戦勃発のときのあの手紙」(主人公安田の「弱さと卑屈」が「露骨に書き留められた」とされる；p. 192でも再び言及)；《←(決断を)先延ばしとどう関わるのか，あるいは手紙を公開したいという意味か?》

〈3〉「ドイツ共産党は呼びかける　1945年6月11日」(p. 187)から，「日本共産党出獄同志」名義の「人民に訴ふ」を連想し(p. 188)，さらにピーク*の演説集で確認する(pp. 190f.)，という叙述の流れ；《* Friedrich Wilhelm Reinhold Pieck, 1876-1960, 東ドイツ初代大統領》

〈4〉上記した後半の「三人」の３人目が誰を指すのか；うち２人は安田家を訪ねてきた岸本よし江という小説家(pp. 193f.)と，安田の古い知り合いでジャーナリストの山本恒志(pp. 194fff.)。あと一人が，上野の美術館で姿を見ただけの須田(pp. 196f. パリから逃亡云々)か，須田との出会いから連想された野上(pp. 197f.)か，はっきりしないように思われる件。安田に親和的な思想動向からは須田だろうが，野上についての回想に比べてあまりに須田に関わる描写が短いので。

2　先行研究の概要　{以下，『甲乙丙丁』の類似箇所を，甲＃○と記す；←全57パート中}

専論は廣瀬著書の第5章1のみ。他は他作品との関連付け，とくに『甲乙丙丁』読解のための補遺的素材として言及。上記〈1〉〈2〉〈3〉〈4〉全てについて議論した論考は管見の及ぶ限り存在しない。

満田郁夫「『五勺の酒』『写しもの』の線―『甲乙丙丁』論への手がかり」，『文学』39－3，1971；中野重治が1961年に「春さきの風」「五勺の酒」「写しもの」の線で出直す，的な文言を書いた(全集22)ことから，この「線」にまつわる考察。一度この「線」を否定しつつ，その「線」上にある一作として「プロクラスティネーション」に言及。とはいえ，鹿沢の手紙(甲#26)と大戦勃発後の手紙(甲#16)が，それぞれ『甲乙丙丁』にそのまま引用されていることの指摘のみ；←上記〈2〉+α

円谷真護『中野重治―ある昭和の軌跡』社会評論社，1990；「変革主体における持続と断絶」パートで言及。pp. 229ff. では，満田論と同じく二つの手紙が『甲乙丙丁』で繰り返されている件；同上。

p. 231では「戦後の転向の一タイプ」として，「もと左翼シンパの日本人気象学者が，グリーンランドで観測や研究をしている。その仕事は，米国の対ソ戦略の一環に組み込まれている」とされる。しかし，「野上」は「気象学者」とされていなかったし，彼が「もと左翼シンパ」だという描写も本作に無かったのでは？；←上記〈1〉＋明らかな(or 意図的な?)**誤読**では。

松下裕『評伝 中野重治』筑摩書房，1998；『甲乙丙丁』への言及の中で，pp. 354f. に２頁ほど「プロクラスティネーション」の位置づけが記されている。本作の二つのキーとして，「人民に訴ふ」（上の〈3〉；←甲#22で少しだけ言及）と(中野の菊池寛宛）手紙(上の〈2〉)をあげている。おそらく，〈2〉〈3〉を直接に対比しうるものとする唯一の先行研究かと。

木村幸雄「『広重』をめぐって」，『言語文化』16，1999；「貼り紙」「帰京」との関連で，大戦勃発後の手紙について長々と考察されるのみ(pp. 109f.)。「貼り紙」で「転向」の語句が出ることから(全集4，p. 135)，プロクラスティネーションという語についてもそう解釈しているようにも思える。末尾では同作が転向問題を引きずっている，的な纏め方になっている；←上記〈2〉のみ＋**誤読**であろう。

津田道夫『回想の中野重治―『甲乙丙丁』の周辺』社会評論社，2013；サブタイトルのように『甲乙丙丁』論を装っているが，実際には作品論というより，1960sを中心とした中野と日本共産党に関わる事実関係を追跡した書。「プロクラスティネーション」については主に『甲乙丙丁』に採られた箇所に関わって複数箇所に出るが(p. 73，p. 77，p. 1114，p. 139，pp. 207f.，p. 215)，うち複数で転向を主題とした作品と位置づけられている(p. 77，p. 215)。モデル探しを含む史実との照応として，p. 139に「プロクラスティネーション」で鹿沢の手紙として引用されたものが，実際には窪川鶴次郎が宮本顕治を非難した手紙であった旨の記載がある(甲#26で“吉野”と)他，有益な情報が少なくない。

廣瀬陽一『中野重治と朝鮮問題』青弓社，2021；第5章「「科学的社会主義」と少数民族の生存権」でほぼ専論として議論されているが，論理の飛躍が著しい。本作に関しては主に前半に注目し，キューバ危機と関連させて野上を「軍との関係を断ち切らず／断ち切れず先延ばししている科学者の社会的・倫理的責任への批判」(pp. 210f.)を現す，と相当に恣意的な解釈を行う；《←本作p.167で言及される「キューバ問題」は，「死ぬのは全部ではないという議論」と共に言及されるが，その“議論”を廣瀬は1962年10月『世界』に掲載された党中央委員・内野竹千代発言とし〈津田本p.114と同;＋ 甲#20でも〉，そこで「少数民族の生存権に対する鈍感さ」が露呈していると批判〈廣瀬書pp.209f.〉;⇒しかし，中野の小説のこの件では，この箇所に続いて少数民族云々は言及されていない＋作品の方向性として，「プロクラスティネーション」を自覚するのは主人公の安田であって，野上では無い筈;←上記の円谷本とは別方向だが，類似の**誤読**か》

さらに，上記〈3〉も参照して，唐突に「前半と後半の話題が有機的に連関していることは明らか」(p. 213）とするが，明らかではないような。そもそも廣瀬は，安田が地球儀でグリーンランドを見て野上を再び回想する箇所に出て来る，「「あともどりの大跳躍」なしに世界史が進むと考えるのは，弁証法的でもなければ科学的でもない」(全集4，p. 179)に，飛びついていた。廣瀬はここから，本作が「科学的社会主義」を批判している，レーニン論を経由して中野は少数民族の生存権を考えようとしている云々，と本作の読解から次第に外れてゆく；《cf. 甲#20に「少数民族」の語は出る；＋参考;レーニンらソヴィエト政府は1917.12にウクライナに侵攻し，1921迄にボルシェヴィキがウクライナを征圧》

小括；〈3〉に若干触れるものもあるが，上記〈1〉〈2〉の考察が主体(何故か〈4〉は皆無)；⇒以下，本プレゼンのサブタイトルのように主に〈1〉に焦点を当てつつ他にも考慮して本作を検討したい。とはいえ，先行研究として有益な議論のあるのは，松下1998著書と津田2013著書のみでは。

3　作品の語り口 ｛ページ数は新しい『中野重治全集』第4巻〈筑摩書房，1996〉による｝

以下，一つの纏まりごとにキーワード的な文言をゴチックとした後，概要してゆく。

イントロダクション；3月21日(春分の日；cf.甲#42「明日はたのしい日曜日」)，安田は妻子が出かけていて留守番(p.162)。バス道路からの埃と便所の匂いについての苦情(p.163)。安田が読む，おそらく朝刊の記事と彼の感想(pp.164f.)。記事の気候の話(地球の自転が狂う云々)から，地球儀に眼をやる。ヴィニールの地球儀をデパートで買った経緯(pp.165f.)。

地球儀を見て人類の運命を考える；「アメリカが針のようなものを吹き上げて，ヴァン・アレン帯がどうとかなつたということを安田は知つている」(p.167；←意味不明，この放射線帯の発見は1958年)。キューバ問題の回想(1962.10-11;cf.甲#41)，核戦争になっても人類全体は死なないという議論。その後に共産主義天国になるとしても，そうした考えは背徳的だ云々(pp.167f.；cf.甲#20,#32,#38,#57ほか)。科学史の写真挿絵で昔見た，地動説登場直前の学僧(コペルニクスか?;←司祭とされることがあった)が描かれた絵について，高遠なものと荒唐無稽なものとが共存すると安田は感ずる(pp.168f.)。ペンタゴンやキルギスで働いている人と，(かつては学僧と無縁だった)安田は今や無関係ではなくなった。その時の「断固たる闘争」を回顧(p.169；←“闘争”はコペルニクスの？)。

友人野上を回想；安田が再び地球儀を見てグリーンランドが見えたことから。去年癌で亡くなった野上の葬儀で宗教的な言が告別の詞として語られたことの回想，野上の国際的な活躍(雪の国際学会の副会長)，グリーンランドでの研究が米空軍の援助によっていたことについて，安田が野上に聞きたいと思っていたこと(pp.170f.；←実際の中谷の研究は1957-60で，キューバ危機とは時期がずれる)。

{インタルード} 野上についての回想から連想して,海外で活躍する若い２人について；「新しい世代」の「学者たちの外国移住」(p.171)の例。安田の遠縁の三宅家で遭った平井夫人の息子が米国の大学で数学をやって，若いのに賞を得たこと，昔の友人だった森の妹の息子が物理学の助手になってユトレヒトに行った話(pp.171ff.)。しかし，安田や野上らは1910年代から30年代まで日本でやってきたので，この世代とは違う。

グリーンランドおよび野上についての回想，再び；むかし(戦後)野上が安田に，グリーンランドの雪が全て溶けると島が浮き上がってくると説明した。そこへ米の軍用機が来て，実験観測のための地下街が出来ていること(pp.173f.)。そこでの研究は「アメリカの反ソ戦略体系に組み込まれて」(p.174)おり，米原潜の核弾頭で「一丁あがり」になるのが自分だと困る，なのでこの件を安田は野上に聞いてみたかった；《←なぜ米国が安田に核弾頭を打つと考えるのか？;意味不明では》。

安田と野上は同じ高等学校を出ていた。1935,6年頃，有楽町で見た「雪国の春」という名の“文化映画”試写会での，映画の内容と野上の発言に安田が共感を覚えたこと(pp.175ff.)。しかし，野上は「ソ連を取りまくアメリカの軍事基地網のなかの重要な一点」(p.177)で働くように変わってしまった。敗戦後何年目かに安田が野上の文章を高級な雑誌で読んだ時，地球を「ぶんまわし」など彼の表現を反動的と思ったこと(p.178)。この時期から野上は米政府と結びつきを持っていたのか。

「大逆転」について；第一次大戦でもしドイツが勝つとしたら，ヨーロッパにドイツの隷属国ができることになり，ブルジョア的ヨーロッパにとって後退につながる。「「あともどりの大跳躍」なしに世界史が進むと考えるのは，弁証法的でも科学的でもない....」(p.179;←ここは廣瀬前掲書とは真逆に，二重否定文なのだから，弁証法的唯物論も科学的社会主義も疑われていないのでは?)　全面的核戦争などあったら，労働者も資本家も悪平等でいっしょに蒸発させられる(p.180)。

{インタルード的に...}；安田が(朝食後)，入れ歯を外して洗う描写あり(pp.180f.；cf.甲#19)。

鹿沢信吉から手紙が来たことと，その引用など；鹿沢は安田の古い友人だが，滅多に連絡してこない。電話は欠席の連絡のみだが，1年に1回ほど長い手紙をよこす。鹿沢曰く，安田の健康を気遣って

いること。近藤の会合での笑いに不快感。4，5年前に近藤に意見を述べておけばよかった。鹿沢は近藤をオブローモフシチナ(オブローモフ主義)と；+自分のプロクラスティネーションに嫌気がさす云々(pp.181fff.；甲#26では「近藤」でなく「吉野」)。安田は英語の字引を取ってきた(p.184)。

{再びインタルード的に}庭に出て，糞尿の匂いを生で受ける。(おそらく前半・後半を分ける1行空白の後も）それが続く。東京五輪の宣伝で，水洗便所にするようにとの看板など(pp.185f.)。

プロクラスティネーションの意味ほか；プロクラスティネーションについて鹿沢は自身のことを言っていたが，安田にとっては昨日今日ではない。**1931年***以来，とくに「1941年末の大戦勃発のときのあの手紙」(p.186；甲#16)をどうするか(*同年は，中野が共産党に入党した年)。字引の引用。その語は，自分の「弱さと卑屈さ」を精神の問題としてとりだすことに関わっていた(pp.186f.)。

炬燵わきにおいてある写真コピーからドイツと日本の敗戦後について；1945年6月11日，ナチス降伏の直後，"Schaffendes Volk in Stadt und Land!"...("schaffendes Volk"が"はたらく人びと"と訳されているが?；or 成し遂げた?)，安田は同年10月20日付けの「人民に訴ふ」(cf.甲#22)を想起した。「ファシズムから世界を解放するための連合軍の進駐」，「米英および連合諸国の平和政策」(p.189)という文言に違和感を覚えたこと。なぜ「ひどいことでしたなあ……」という言葉が出なかったのか。「似非社会主義者」でないのは，「いま釈放されてきたわれわれ」(同上)だという文言にも。

ドイツの呼びかけには，戦争とその結果に「すくなからぬ罪と責任とがドイツ人民にある」(p.190)と書かれていた。安田は気になってピークの演説集を探してきた。そこには，ヒトラーを増長させ戦争犯罪に加担したのはドイツ人民であり，そこから自由になれたのも自らの力ではなかった，などとあった。こうした文言は，「人民に訴ふ」にはなかった。なぜこのような違いが生まれたのか，安田は「あの手紙」を読み直す前提として(?)，1936，37，38年のことを思い出そうとした(p192)。

1行空白あり(単行本では，空白はここのみ)。

岸本よし江という作家が訪ねてきたこと；彼女はエキセントリックな所があった。労働組合運動に入り，警察の拷問を受けて堕胎させられた(cf.甲#46～49他；中本たか子?⇒後述)。安田は彼女とは初対面で話ははずまなかった。彼女が再び労働運動と関わりをもったことから，「死ぬまでも一心こめている」のは「単純な過去としてちがつちまつたのだろう」(p.194)とやましい気持ちで考えた。安田は，岸本の「どうしたらいいんでしょうかねえ」という問いに答えられなかった(pp.193f.)。

古い友人だった山本恒志の訪問；山本はブハーリン裁判について検事のヴィシンスキーを非難していたが，安田からすると自分に縁切りを申し渡しにきたように思えた。山本はスペイン人に対する日本人側の同情をここ1年ほど皮肉っていた。安田は「狂犬なら撲殺しなければならぬだろう」(p.196)と答え，山本は満足して帰った。安田はソ連とスペイン人民戦線とを総体として支持すべしと話題を変えるべきだった，と後悔した。しかし一歩踏み込むことができなかった(p.195f.)。

上野の美術館で須田の顔を久しぶりに見たこと；三人連れで，あとの二人は背の高い老人が父親で，もう一人はヨーロッパで結婚した細君らしい。須田はパリーを逃げ出し，モスクワで何かに出くわした。あとで手紙ででもその何かについて聞けば良かった，と安田は後悔した(pp.196f.)。

野上についての回想，続々；一緒に短い旅行した時(おそらく敗戦後)，野上に「案外，君あ，謙遜なんだなあ……」もしくは「案外，君あ，傲慢でないんだなあ……」(p.197)と言われたこと。なぜその時彼に尋ねなかったのか。それでも，こう言われたことで「安田が救われていた」(p.198)。それこそが(グリーンランドや米空軍より?)はるかにプロクラだ，と安田は感じた。「連合軍に感謝する……」，その時何故何も言えなかったのか。「...そこで，それでは，これから私がプロクラでなくなろうとすることにたいして茶々を入れぬでください。」(同上)，と結ばれる。

4　上記<1>から<4>まで；とくに野上の描かれ方<1>について(先に<2><3><4>について)

まず重要なことは，内容が作中で公開されていない<2>「1941年末の大戦勃発のときのあの手紙」(p. 186；←モデルは中野の菊池寛宛手紙か)に典型的なように，中野重治の個人史をある程度考慮しないと，主人公安田の描かれた言動だけでは考察不可能な作品だということ。発表者が昨年2月5日に本会で発表した「小説の書けぬ小説家」*(1936年)のように，ある程度自律性を有する作品ではない。

《＊以下の形で論文化した; 由谷裕哉「中野重治「小説の書けぬ小説家」における「オン・パニマーエット」の背景」,**『文化×社会』**7, 2022.9;←この拙論においては，主人公を著者と同一視したり，登場人物のモデルを探したりする先行研究を批判的に捉えている》

↳ したがって<3>の解釈も，ドイツ共産党の対応と比較して1945年10月の「人民に訴ふ」(作中で明記されていないが，徳田球一ほかによるもの)を批判しているのは明らかだが，作中の情報だけでは何故“プロクラスティネーション”と関わるのか分かりにくい；←中野の個人史では，彼の日本共産党再入党は1945年11月であり，直前に「人民に訴ふ」があったにも拘わらず再入党したことになる(上記のように，作中で安田が共産主義に親和的だという設定であるものの，党員であるとか再入党であるとかの情報は一切無い；←あるいは，わざとぼかしているのか？)。

cf. なお，本作より1年余り後の**「眺め」**(1964.8)は，松尾尊兊(たかよし)という京都大学の近代史学者の案内で中野が**河上肇**の墓詣りに行く実話をモデルにしていて，その道中で松尾から聞いた高尾平兵衛のレーニン会見記が重なる(↳ 松尾『中野重治訪問記』岩波，1999)。このように実在する/した人物をモデルに展開するも，作中で批判される「水野こと吉野惣吉」(全集4，p. 330)が誰のことか分かりにくい。本作で当時の党書記長だった宮本顕治と関係が薄そうな「人民に訴ふ」を槍玉にあげているのも，同趣旨か？；《←徳田球一は1953没; ⇒宮本体制はおよそ1958より》

さらに，<4>も難問。p. 192の1行空白の前に，「**1936，7，8年という時分のことを思い出した**」とあることに対し，先行研究の幾ばくかが中野の**転向**を意味すると解釈してきた；《木村1999論文，津田2013著書など》。しかし，中野が実際に転向し出獄したのは1934年5月であり，上記３箇年は別件の筈；《←**1936年**は二二六事件，＋この年よりスターリンによる大粛清始まる;**1937年**は7月に盧溝橋事件》

↳「三人」の１人目である岸本よし江については，彼女が労働組合運動に再び接触し，「いろいろにしてやらせてみる」(p. 194)という発言に対し，安田は嫌悪感を表明しているように思われる。

なお，岸本の「いろいろにしてやらせてみる」発言への安田の嫌悪(p. 194)は，相当前の作品だが，**「一つの小さい記録」**(1936)末尾近くでの，訪ねてきた島田(生江健次がモデルとされる)による宮古を転向させるかどうかという問いに，主人公で語り手の佐藤が憤りを感ずる描写と近いかも；《cf.甲#46;1964年の日曜日に砂田に会う為に代々木の本部ビルを訪れた田村が,「ツーロン港」ポスターを見て1945年秋に佐藤を見舞いに行ったことを回想。佐藤の細君八島辰子を田村は14, 5年来知っていた。投獄される時のエピ，彼女の小説を田村が手厳しく批評したこと。「金無垢の図式主義」，論理的な錯乱。#47;AA作家会議関係の丸ビルでの会議で八島辰子が倉持憲を推薦，佐藤忽蔵の推薦を代弁云々と発言し，議長の信時が怒って退席したことの回想。#48;(砂田と会った後の回想)佐藤きみ子<八島の本名>は獄死した多摩を倉持が“説得”したことを知らなかったらしい。#49;砂田との会話の中で，1945年秋，体調不良の佐藤の家で，吉野喜美子が慈愛に満ちた目で，きみ子が小説を書かないでいることを誉め，田村が驚愕した回想;←#56でも八島辰子をrefer.》

２人目の山本によるヴィシンスキー批判に対しては，「狂犬ならば撲殺しなければならぬだろう」(p. 196)とヴィシンスキー(と背後に居たと考えられるスターリン)を肯定する意見を述べてしまう。

３人目が須田だとすると，「どうして彼はパリーを逃げだしてきたのだろう。モスクワで彼が出く

わしたのはどんな事実だつたのだろう」(p. 197)がキーだろうが，時期的にスターリンによる大粛清(ブハーリン処刑を含む)のことか？；⇒とすれば，先に山本のブハーリン擁護に反対し，おそらくスターリンを擁護する立場をとったこととの関係は？；《←cf.前者は,『むらぎも』パート9末尾のスターリン賛美―「代数の証明のように伸びて行く文章。ほんとうの新しいスタイル」―と同じ(?)だが，後者はどうか》

〈1〉について；こちらも作品の根幹に関わると思えるが，さらに難問であろう(なお，これに関わる箇所のみ甲とは無関係)。野上に対しては，およそ以下の３箇所で触れられている。

○ pp. 170f.；野上の葬儀で哀悼の言葉が宗教的だったこと(ミネルヴァ書房からの評伝『中谷宇吉郎』には無し)への違和感，彼のグリーンランドでの研究が米空軍の直接援助によっていたこと。
○ pp. 173-179；野上のグリーンランドでの研究が米国の反ソ戦略態勢に組み込まれていることの詳説。その具体的な有様(軍用機で観測機械や実験道具が送られてくること)など，野上が安田に説明〈p. 174〉)，1935，6年頃の文化映画「雪国の春」試写会における野上の意見に，同席していた安田が共感したこと(「子供のときの経験のこととしてそのまま認められた」p. 177，ほか)。それが，いつから野上が「アメリカ帝国主義」(p. 178)に協力するように変わってしまったのか。戦後しばらくの雑誌に載った野上の文章を，安田が「反動的」と思ったこと(同上)。
○ pp. 187f.；野上に対する「プロクラ」は,「グリーンランドだのアメリカ空軍だのいうことでなくてきいておくことがあつたのだ」(p. 197)，とされるので，先の２箇所が否定されているのか？；⇒「案外，君あ，謙遜なんだなあ……」もしくは「傲慢でないんだなあ……」という一言で,「安田の頭に「反省」といつた言葉として浮かんだのだつた」(p. 197) とは，上の「反動的」(p. 178)という野上評価に対してか。ともあれ，上の一言で「そこで安田が救われていた」(p. 198)のだから，本作全体の方向性としては野上批判では有り得ない。

このうち前半は，キューバ危機(1962.10-11)，内野竹千代発言(1962.10)と結びつけて描かれているが，上記のように実際の中谷宇吉郎のグリーランドでの調査は1957-60であったので関わりはない。とはいえ，評伝によれば中谷は第五福竜丸事件(1954.3)に対して「ちえのない人々」なる新聞寄稿を行い，そこで米の水爆情報がソ連に漏れた旨の批判をした由。このことから中野が，執筆時点における核戦争に対する一連の不安感に中谷のグリーンランドにおける研究活動を重ねたのかもしれない。

本作で注目されるのは，前半での野上のそうした否定的な位置づけが，末尾で正反対に変わってしまうことであろう。本発表では，その整合的な解釈はできないが...；《←もっとも，野上を左翼シンパとする円谷1990著書も,「プロクラスティネーション」を野上のことと見る廣瀬2021著書も，全くの的外れ》

↳ 加えて鹿沢(モデル窪川?)の手紙にある“近藤”が宮本顕治を指すとすれば，作品全体として鹿沢の近藤評価(甲では古川の吉野評価)―“オブローモフシチナ”(p. 184；無為，退廃的，or 貴族趣味?)―がその後注目されず，むしろ徳田ほか**“府中派”**による「人民に訴ふ」(や小物でしかない内野竹千代)が槍玉にあげられていることからも，党に対する**優柔不断さ**が表出したと見るべきかも。

cf. 本作より９年前の『**むらぎも**』(1954刊) に，既にパート４で福本和夫モデルの人物を好意的に―「**考え方のスタイル**」が「**新しい**」云々―描いている。福本は1927年にコミンテルンによって批判されて失脚し，『むらぎも』時点で日本共産党内で重視される人物ではなかったので，その人をモデルとしたキャラクターを好意的に描くことに，中野自身の党に対する姿勢が現れているのでは；《←なお，中野は1947.4⇒1950.5は参議院議員，同6落選，1950.9?党から除名⇒1952.1?復党，1954.8『むらぎも』刊，1955.六全協，中野が1958.7より党の中央委員，1961.7より除名の1964.11まで議決権の無い中央委員》

{参考①；中野重治と中谷宇吉郎の第四高等学校時代}

中野；1902(M35).1生まれ⇒1919(T8).9第四高等学校に入学⇒1921.3，1923.3落第⇒1924.3卒業

中谷；1900.7生まれ⇒（一浪後）1919.9第四高等学校に入学⇒1922.3卒業。在学中は弓術部。

↑つまり，クラスは違えど(中野は文科乙類)，1919年度と1920年度(半年のみ?)は同学年だった。

{参考②；第四高等学校の『北辰会雑誌』への中野重治の寄稿<＋中谷宇吉郎の言及>；中谷卒業まで}

号数	刊行年月	中野重治の寄稿など(ほか収録記事について)	中野の同人雑記など	備考
86	1919(T8).12	（巻頭が高坂正顕の論説）		表紙ビアズリー「サロメ」。雑報「弓術部」に中谷の名無し。
87	1920(T9).3	(第 1 回短歌会詠草の記事あるも，中野作は無し)		(詠草短歌に高坂作歌あり)
88	1920(T9).6	各部々報の「四高短歌会」(5.22付け)に，中野の作歌 4 首が初掲載		雑報各部々報「弓術部」の，「五月十六日校内競射」に**中谷**の名が見える。
89	1920(T9).12	創作「口笛の話」(8 頁ほどの創作，異国情緒＋詩的)，雑報「短歌会記事」に中野の作歌 5 首掲載		部報「弓術部」の「新入生歓迎競射会」以下の執筆者が**中谷**。
90	1921(T10).3	「四高短歌会詠草」に 4 首掲載，各部々報の「短歌会記事」(2 月 5 日)にも”中野君”refer	同人雑記「貧乏と寒さにふるえながら」(神経衰弱と貧乏で，書けなかった云々)	←中野，この号から同人雑記に執筆。
91	1921(T10).7	創作「国旗」(6 頁ほどの創作，少しプロ文芸っぽい？か)	同人雑記「編輯後に」（巻頭，文芸雑誌では無いが矜持を，的な)	←雑報に「短歌会記事」無し
92	1921(T10).12	詩作 4 篇「塵労鈔」(「妹におくるうた」ほか)	同人雑記「ひとりごと」(巻頭，2 頁に及ぶ，この夏の事件に苦しんだ，外国に行きたい云々)	←雑報「短歌会記事」に中野無し。部報「弓術部」で南下報告「三高戦」で**中谷**の名。記事も「中谷生」。
93	1922(T11).3	(掲載無し)	同人雑記，無題(病気で編集に携わらず云々)	←雑報無し

{参考③；中野の『北辰会雑誌』時代に関する先行研究}←発表時までに確認できたもの，他にもある模様

亀井秀雄『中野重治論』(三一書房，1970)，「妹におくるうた」の項(pp.30-50)；『北辰会雑誌』第92号所収「塵労鈔」のうち，タイトルの詩に関して長文の評論ないし検討を行っている。

杉野要吉『中野重治の研究　戦前・戦中篇』(笠間書院，1979)；『北辰会雑誌』掲載美術に見られる中野の関心，小説４篇のうち第96号所収「泊り」(1923.7)以外の３篇と第92号「塵労鈔」のうち詩「断章」について概要し，評価を加えている。

松下裕『評伝中野重治』(筑摩書房，1998)；第98号短歌号のうち中野「占」より３首引用，第94号所収「姉の話」(1922.7)および第96号「泊り」の概要と評価；＋『北辰会雑誌』以外に投稿した(不詳)1923頃の「大道の人びと」(これのみ全集１掲載)を称讃する，等など。

小川重明『中野重治拾遺』(武蔵野書房，1998)；第96号の表紙にマイヨールの絵が載る版を古本で入手した話。「歌のわかれ」のエピソードと対応するとするが，なぜ２種類の版があるのかが考察の主体となってゆく。しかし，こうした推測は重要でないのでは？

古家敏亮「中野重治の文学的始発－四高・「北辰会雑誌」・金沢」，『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』7，1999；全体に装飾的な文章が多く，論考としては関心しない。主に詩作に注目し，『北辰会雑誌』掲載の中野作品に関しては第92号「塵労鈔」＋(松下も取りあげていた)「大道の人々」に言及する。他に「同人雑記」欄を概要するのは新しいが(p.5)，発表者が見た第96号には掲載されていない「同人雑記」が参照されている(第96号の二つの版?については，小川前掲書を参照)。

{追記；前々回<2022.10.1>『むらぎも』１のドイツ語箇所}←当日，独和辞書を持参していなかったので….

Es zog einmal eine grosse Karawane durch die Wueste.... ；「むかし，むかし，一隊の大きな隊商が，砂漠をわたっておりました」と慶應予科の生徒が訳した後，安吉が「**ここのエスというのは何ですか。つまり文法上いってですネ….**」と問う箇所(全集５，p.147)。なお，Міesteは砂漠，zog は ziehen の過去形。ziehenは，ここでは“**移動する**”意味の自動詞なので(他動詞としては，引く，引っ張る，などの意)，es は その目的語ではない。

アクセス独和第３版によれば，es の用法に“**実質的な主語名詞を予告して**”の用例(↓)が見られる。

Es war einmal ein Koenig. (昔々一人の王様がおりました)；⇒参考として，「**この es は必ず文頭に置かれ，定動詞の形は実質的な主語の単数・複数に対応する**」とある(Karawane<女性名詞>, Koenig<男性名詞>はともに単数なので，ziehen, sein の3人称単数過去形の zog, war となっている)。

cf. クラウン独和第4版では，“**形式主語**”とする(昨年10月の発表者の発言通り)； Es bestehen keine Bedenken. (懸念すべき点は一つもない<Bedenkenは複数>)；この辞書では，文法非人称化を見よ，とされており，その箇所では，「**非人称の es が文頭に置かれて，主語のように見えるが(形式主語)，本来の主語は後方にある場合，非人称化された文という**」とされ，次のような用例が掲載されている； Es spielen mehrere Kinder auf der Strasse. (何人もの子供が路上で遊んでいる；←KinderはKindの複数形)

しかし，先のアクセス独和では，“形式主語”を自然現象や状況・時間を表す場合に主語に来るのみとしている。Es regnet stark.(雨が強く降っている) ; Es ist schon spaet.(もう遅い)；⇒つまり，日本におけるドイツ文法理解において，文頭esの解釈に揺れがある，ということでは？

↳ したがって，「**文法なんかに深入りはできぬゾ….**」(同，p.148)と安吉が用心したのは，自分もesの文法的な意味を的確に説明できるかどうか自信が無くなったから，と読むべきでは(昨年10月の発表者発言の通り)。続く箇所での，「じじつ安吉は，これくらいではごまかせるものの，ちやんとしたドイツ語はわからぬだらけでこのごろ戸惑つているのだつた」(同上)とも対応する。

その後，オーベルマンス教授の講義がまるで分からなかったことの回想から，慶應予科生が教科書に真っ黒に書き込みしていることを見つけてその少年を侮蔑する方向へと，安吉の意識が急変(自分を卑下⇒相手にマウント)；⇒安吉の自信の無さ＋自分より非力な者への見下し，が共存するという点が，語りのポイントでは？；《cf.先述の「一つの小さい記録」で，村山知義モデルの大森は批判的にではあれ敬意をもって描かれるが，生江健次モデルの島田はお粗末な小物として描かれることとも類似？》

⇒今回の発表課題である「プロクラスティネーション」における，安田の党に対する煮え切らない描写(例；当時の党トップであった宮本顕治批判をスルー＋非難しても無問題であろう徳田球一＋内野竹千代＋中本たか子を参照)と，ある意味で通底しているかも。